教師を育てた
言葉たち

No. 019

山口県立下関南高校
松村成通先生
まつむら・しげみち

◎教職歴 31 年。同校に赴任して 14 年目。進路指導部部長。担当する地理の授業で NIE(Newspaper in Education= 教育における新聞の活用）を実践するなど、キャリア形成の土台としての思考力や表現力、主体的に学習に取り組む態度の育成に注力する。

14年前、前任校から下関南高校への人事異動が新聞に掲載された直後、ある教え子からメールが届きました。そこには、「先生、お疲れ様でした」という言葉とともに、「確か下関南高校の校訓は、『日々に磨かん 智と徳と』でしたよね」と書かれていました。その教え子が、なぜ他校の校訓をわざわざ私に教えてくれたのか、その時は特に気にしませんでした。それよりも下関南高校で学ぶ生徒たちの気質はどのようなものかということに気持ちが向いていました。それまでの私の指導は、生徒にひたむきさ、がむしゃらさを真正面から求めるスタイルでしたから、そんな自分の指導が、次の学校でも通用するのか不安だったのです。

案の定、赴任当初はうまくいきませんでした。授業中の態度について 1 人の生徒を注意したところ、その生徒がほかの生徒と一緒になって「あの先生、うるさい！」と、私に反感を抱き、生徒たちとの距離が一気に広がってしまうようなこともありました。前任校の生徒たちは、まだまだ教師としての経験の浅い私の指導も、素直に受け止めてくれたので、反発する当時の生徒たちに私は戸惑いました。

それでも、生徒たちの様子をじっくりと見ていくと、この学校ならではの生徒特性が分かってきました。その 1 つが、生徒たちの中にある、下関南高校生としてのよきプライドでした。この学校では、集団としてひとくくりで叱咤激励することで全員を変えていくような指導は通じにくいのではないかと考えた私は、それまで以上に個別面談をするようにしました。そして、生活面や学習面の指導だけでなく、「そもそも、君は何を目標としてこの学校に進学してきたの？」などと、高校生活の本質を問う生徒との対話に一層重きを置きました。一人ひとりと話すと、生徒は自分のことをよく話してくれました。そうして生徒と丁寧に向き合ううちに、どの生徒も、心の中では自分の進路に対して真摯に向き合おうとしていることがよく分かりました。その結果、前任校とは違う、新しい指導スタイルが生まれ、それに少しずつ手応えを感じるようになりました。

着任して 4 年目を迎えた頃のある朝、校門を入ってすぐ右手にある校訓碑が目に入った時、「私の求めていたものはここにあった！」と気がつきました。かつての私は、自分の指導観を信じていました。そしてそれは、一人ひとりの生徒への「こうだろう」「こうあるべきだ」という思い込みにもなっていました。しかし、日々を丁寧に生徒と過ごす中で、それぞれの生徒の事情がより鮮明に見えてきたことが、私をそうした思い込みから解放していきました。生徒との向き合い方は 1 つではない……実感を重ねるほど、私は指導の場面で迷うことが多くなっていました。そして、不思議なことに、そんな自分のあり方を心地よく認められるようになりました。

生徒と信頼関係を築くためには、「日々に」生徒を見つめ、耳を傾け、語り合うことが大切だと、本校の校訓が気づかせてくれました。残り少ない教員生活を、これからもこつこつと地道に頑張っていきたいと考えています。

山口県立下関南高校　全日制／普通科／共学／1学年約 140 人／ 2019 年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、千葉大、神戸大、岡山大、山口大、九州大、下関市立大などに 65 人が合格。私立大は、青山学院大、法政大、関西学院大などに延べ 127 人が合格。

＊プロフィールは 2020 年 3 月時点のものです。